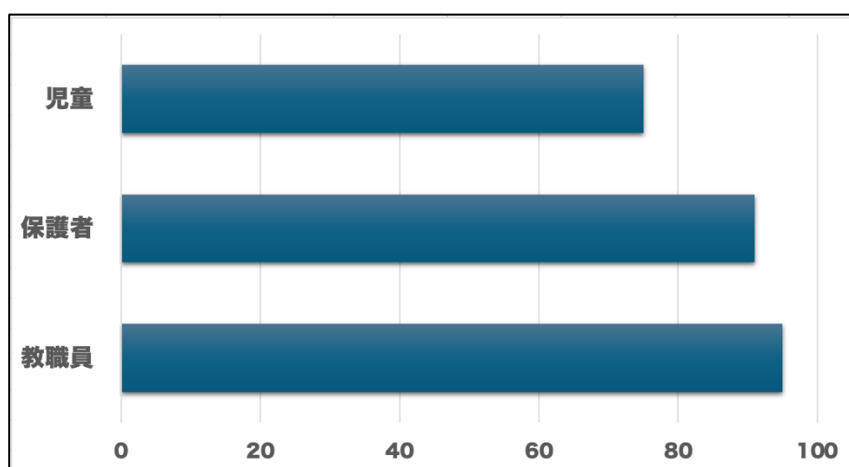


自己存在感の感受



質問番号

【児童】【保護者】【教職員】

共通して、1・2・3・4・5

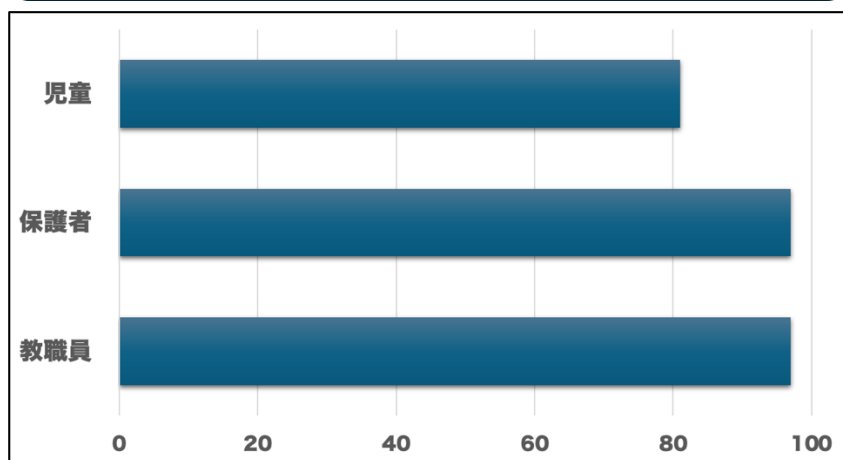
自己存在感の感受とは、「一人ひとりの児童生徒をかけがえのない存在と捉え、個性や独自性を大切にする」ことです。子どもは、あいさつや身の回りのこと、みんなのための仕事を進んでできるか、大人は、それらができるように支援しているかということです。また、自分の良さや強みがわかったり、自信をもてたりしているかということも関係します。自分の良さや強みは、自分だけでわかるものではなく、友達との学習活動の中で気づいていたり、発揮されていたりするものです。

児童への質問2「じぶんの よいところが いえる」では、肯定的な回答が50%にとどまった一方、保護者の方や教職員が、「子どものよさを認めたりほめたりしている」という回答はどちらも9割を超えました。「認めたりほめたりしていることが届いているか」という視点での子どもへの接し方が必要かもしれません。

児童への質問4「かかりやとうばんの仕事をじぶんからすることができている」では、この「自己存在感の感受」のセクションの中で児童の肯定的な割合が最も高かった結果が出ました。係や当番の仕事を自分からしようという子どもはとて多いことがわかります。また、その中には全体の状況を見て、さらに自分からできることを探して動くことができる子どももいるようです。今後は、そのように、決められたことや言われたことをするだけでなく、自分で考えて動くことも増やしていきたいと考えています。

児童への質問5「学校での出来事を家の人に話している」という回答では、「子どもに学校での出来事や学習の様子を聞いている」という保護者、「学級だよりや学年だより、ホームページなどで、子どもたちの学習の様子を伝えている」という教職員に続き、「学校での出来事を家の人に話している」という子どもの肯定的な回答は75%になりました。何かあったときだけではなく、普段から何気ないことも含めて、子どもたちの話を聞くこと、大人側が子どものおもいを引き出すような言葉かけや、姿勢を見せていきたいと感じました。

共感的な人間関係の育成



質問番号

【児童】【保護者】【教職員】
共通して、7・8・9・10

「共感的な人間関係の育成」とは、自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる協力的な人間関係を学級の内外に築くことです。

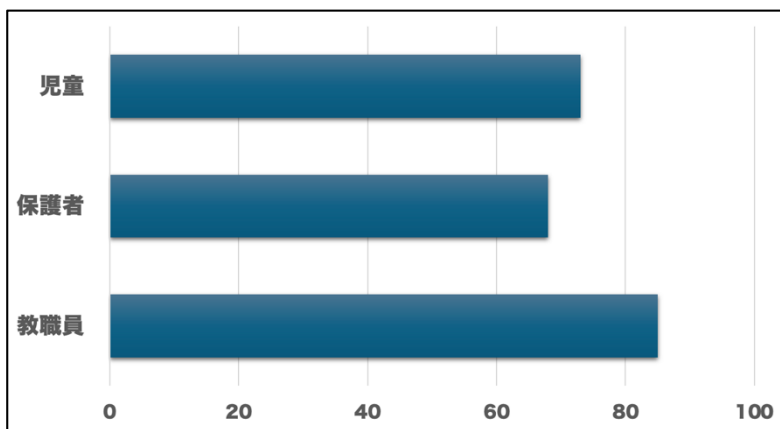
児童への質問7では、「ひとのはなしを さいごまで しっかりきいている」では、9割を超える子どもたちが肯定的な回答をしていました。人の話を最後まで聞くことの大切さはどの子も理解はしているようです。

また、質問8「かんしゃのきもちとして、「ありがとう」や「ありがとうございます」をつたえている」では、感謝の気持ちも伝えることができているという自覚のある児童が9割を超えました。このことについては、保護者の方も教職員も自信をもって声かけをしている結果がうかがえます。今後は、「わかるよ」「それはたいへんだったね」「いっしょにかんがえよう」など、相手の気持ちを想像したり、共感したりする言葉も少しずつ使えるようになるような「共感言葉」がさらに増えるとよいなと思います。

児童への質問9「こまったことがあったら いえのひとや せんせいにはなしたり、そうだんしたりしている」では、肯定的な回答は73%にとどまりました。学年にもよりますが、高学年になると、教職員や保護者の方への相談が減り、友達や先輩への相談が増えるのかもしれませんが、それも子どもたちの成長の一つと捉えることもできますが、普段から、「相談できる」「相談しやすい」と子どもたちが思えるようにしたいです。相談があった際は、校内でもできる限り共有し、複数体制で相談に乗っていきたいと考えています。

児童への質問10「じぶんやともだちとたいせつにしている」では、児童の肯定的な回答は9割を超えました。学校での言葉や行動を実際に見たり聞いたりしていると、「果たして大切にしているのかな・・・」と考えられることもありますが、根本としての意識が「大切にしている」となっていることは安心材料の一つでもあります。また、自分や友達を大切にするための言葉や行動は、日常生活のようなリアルな場面だけでなく、スマホやタブレットを介したデジタルな場面でもその姿勢が問われることになります。特にデジタル空間でのやりとりについては、実際どのような言葉や行動が存在し、そのコミュニケーションの仕方に問題はないかを大人側も注視しておくことが必要だと考えています。

自己決定の場の提供



質問番号

【児童】【保護者】【教職員】

共通して、11・12・13・14

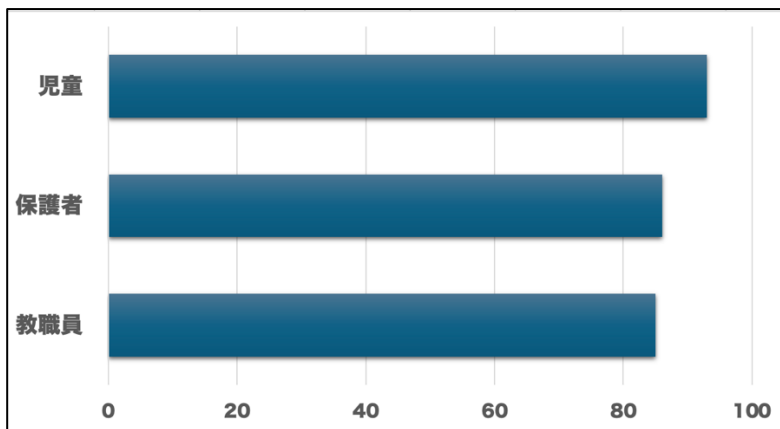
「自己決定の場の提供」とは、自ら考え、選択し、決定し、行動する（発表・制作など）経験が得られる機会を意図的に設定することです。例えば、学校での活動や家庭でのルールについて、子どもたちが意見を出し合い、その意見を尊重して決定する場を設けることがあります。これにより、子どもたちは自分の選択に責任を持ち、自信を持って行動できるようになります。

また、保護者としては、子どもたちが自分で決めることをサポートし、必要に応じてアドバイスを与えることが大切です。これにより、子どもたちは自立心を育み、将来の様々な場面で自分の力で問題を解決できるようになります。

児童への質問 11「じゅぎょうのうちうは、じぶんから すすんで、がくしゅうしている」や、質問 12「かていがくしゅうに じぶんから すすんで、とりくんでいる」では、学校での学習や家庭学習についての主体的な態度について聞きました。どちらも肯定的な回答は、8割に満たない結果となりました。児童の中では、「自分からしているというよりは、先生や家の人に言われたからしている」という意識の児童もいるでしょう。したがって、自主的に取り組む楽しさや具体的な方法については、学校でも発達段階に応じて指導するようにしています。例えば、興味を引き出すために、子どもたちが興味を持つテーマや活動を見つけたり、お互いの活動を共有したりすること、また、成功体験を積み重ねるために、簡単な課題から取り組ませてクリアすることで達成感を感じさせたりすることです。また、子どもたちが自分で目標を設定し、それに向かって努力する機会を与えたり、肯定的な声かけにより、自分から学ぶことの楽しさを感じたりできるようにしています。今後も学習の内容や方法を工夫して取り組んでいきます。ご家庭でも子どもたちのがんばりに応じて適切に褒めることで、学習に対するモチベーションを高めることができると思います。また、環境面では、静かで集中できる環境を整え、学習に取り組みやすい状況を作ることも必要になると思います。

特に低かったのは、児童への質問 13「がっこうや いえで ほんを よくよんでいる」です。肯定的な回答が約6割になりました。この質問に関しては、保護者の方や教職員の回答も比較的低いものになりました。家庭では、放課後の過ごし方が多様化している中、本を読む時間のみを確保するのは難しいのかもしれませんが。学校では、朝学習や課題が終わった場合などに読書の時間を取っていますが、「読みたい本を自ら選び、進んで読む」という姿勢にまで至っていない児童も多くいると感じますので、今後も意図的に取り組んでいきたいと思っています。

安全・安心な風土の醸成



質問番号

【児童】【保護者】【教職員】

共通して、15

「安全・安心な風土の醸成」とは、お互いの個性や多様性を認め合ったり、安心して授業や学校生活を送ることができる風土をつくったりすることです。特に、小学校では、学級や学年で活動することがメインになりますので、その中でのルールや「やくそく」が子どもたちの中で約束されていて、どの子どもも安心して学習できることが大切です。

質問 15 では、「みんながきもちよくすごせるように がっこうや いえでのるうるを まもろうとしている」か問いました。93%の児童が肯定的な回答をしている一方で、そうではないと感じる児童も1割弱います。学校は集団生活の場ですので、お互いが気持ちのよい「ルール」や「やくそく」を考えることが大切かと思います。その際、教室には、様々な価値観をもった子どもや様々な背景をもった子どもがいることを考えることが必要になります。したがって、お互いの考えを尊重しつつ、最適な「ルール」や「やくそく」を考えていけたらよいのではと考えています。また、ルールの意図や重要性を十分に理解したり、ルールがなぜ必要なのかについての理解を深めたりできるように指導していきたいと思います。

それ以外の項目について

質問 18 「さんかいみなみの ちいきのことが すきである」については、9割の児童が肯定的な回答をしていました。学校では、地域の方々に、朝の交通安全を見守っていただいたり、授業にゲストティーチャーとして参加していただいたりしています。また、教職員も授業の中で、地域の公園や川について取り上げたり、地域のお祭りに参加したりすることで地域と触れ合う機会をもてるように計画しています。一方、保護者の方の中には、「家庭や地域等で、山階南の地域の良いところを話したり、ふれあったりする機会をもっている」と感じておられない方もいることが結果からわかりました。コロナ禍以降、身近な人たちのつながりが失われてきた現実がありますが、少しずつ、リアルに集まる機会も増えてきたように思います。防災、減災という意味でも地域の力（共助）は大切です。そのような物理的なつながりも、心理的なつながりもどちらも大切にできるように学校でも改めて考えていきたいと思っています。